Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

幼児同士の仲間の形成における保育環境の役割
－遊びの「場」を通して－

近内愛子
（聖徳大学短期大学部）

Ⅰ　課題および目的

幼児は、興味や関心のある物や遊びを手がかりとして、あるいは、幼児同士の人間関係を契機として集まる。そこには当該幼児たちが次へ飛躍するエネルギーが潜んでいるが、このエネルギーが表出すると、幼児同士の交流が行われ遊びが展開していくとともに、幼児同士の仲間関係もまた形成されていく。もちろん、その過程においては保育者の援助が果たしている役割も大きい。しかし、保育者ばかりではなく、その保育者をも含む保育環境全体が、幼児同士や遊びをつなぐ大きな役割を果たしているということも考慮に入れておくべきであろう。そこで、幼児同士の仲間の形成を明らかにするとともに、そのために遊びの「場」がどのような役割を果たしているかということを公立幼稚園における幼児の実態から明らかにしたい。

Ⅱ　方法

幼稚園における幼児の自発的な活動を対象とし、自然観察法により筆記による記録を主とした調査を行った。

Ⅲ　結果および考察

４歳児Ａクラス（２年３年保育混合）の幼児 C1 から C9 の姿を捉えることができるが、その中でも特に、３歳児のときに同じ組であった幼児、C1、C２、C３、C4 を中心に仲間関係を取り上げ考えていきたい。

1　安心して自分を出せる「場」

2003 年５月６日の事例では、C1、C2、C3、C5 の４人が、他児が作った巧技台の家に乗って遊んでいたところを教師が、自分たちで作って遊ぶように促した。しかし、４人が作った家は、ござを被るという単純なものであった。教師は、さらに家作りについて助言をするが、C5 は「だって、僕たちの家だよ」と応じようとしない。その後、C1 たちが怪獣になって動いていると教師が「本物みたい」と言うと、「暴れ怪獣」と４人が声を揃えて言うというように、C1 たちにとっては、遊びの展開そのものよりも仲間との直接的な結びつきのほうに意味をもっていると思われる。新しい環境の中で安心して自分を出せる場は、親しい友達と一緒に居ることであったのではないだろうか。また、「僕たちの家だよ」と強調したござの家は、仲間関係を象徴する「場」であり友達と体を触れ合い楽しさを味わえる「場」となっていると言えよう

2　感動体験を共有する

2003 年６月 24 日の事例では、園庭の土がひび割れ凸凹している状態を C1 が見つけ、土のかけらを恐竜の化石に見立てたことが切っ掛けになり、遊びが始まった。そこへ、C2、C4、C5 が参加してきた。恐竜の化石を取るという同じ目的に向かっていく過程で、「一杯取れた！」「おーいでっかいの誰か取ってくれ」と互いに刺激し合ったり、競い合ったり、力を合わせたりしながら感動体験を共有しさらに、鍬で化石を掘り起こす場面では、皆で輪になり鍬を高く掲げ「インフォーテ」と繰り返し唱和するというように、幼児たちの気持ちが段々に高まる姿が見られた。同じ目的に向かう幼児同士のかかわりが、一体感を生み楽しい雰囲気がその場を包んでいると言えよう。恐竜の化石を集める遊びの「場」には、物的に囲われたものではないが、幼児同士を一緒にして包み込む雰囲気という目に見えない境界が作られている。それは、そこで遊んでいる者同士が共有する楽しい「場」と言えよう。

3　仲間と自分

先述の恐竜の化石を採集する事例は、感動体験を共有する「場」とともに、遊びの中で個々の関係をもちながらも、同じ目的に向かって、皆と一緒に遊ぶ楽しさを味わっていると思われる姿も捉えられた。C2 は C1 に、C5 は C4 に、それぞれ自分の取った土のかけらを渡すというように、C２は C1 に対して、C5 は C4 に対して、それぞれに友達への思いがあることを窺うことができる。C5 に注目すると、C1 が赤色のバケツを持って「俺のほうが一杯あるぜ」と言うと、C２は水色のバケツを持って「これ軽い」と言う。C1 が赤色のバケツを C5 に持たせようとするが C5 は応じない。C1 は、「俺が一番に C5 の友達になったんだよ」と C5 に言うと C4 は、「俺だよ」と言い返す。C5 は、「やめな恐竜の骨」と C4 に言う。この一連の流れから C5 の行動を見ると次のようなことが言えよう。C5 は、C1 が土のかけらを C4 より沢山取ったことを認めさせたくてバケツを持たせようとしたと感じ取ったのではないだろうか。そして、C1 の差し出したバケツを持たないことによって、C4 とのこれまでのかかわりの中で自分の気持ちを精一杯表したと思われる。ここでは、３歳児からの C1 と C4 の関係と４月に入

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

園してきたC5の関係を巡って、それぞれ3者3様の関係が微妙に変化してきている。C5は、3歳児から進級した他の友達も含めて一緒に鍬をもち高く掲げ「インフォーテ」と唱和し、その後、「楽しいな」と言うのである。これは、友達との微妙な関係やかかわりをもちながらも、個々のつながりだけでなく皆と一緒に遊ぶ楽しさを味わっている姿ではないだろうか。

4　互いに伝え合う

2003年7月1日の事例では、C6とC7が互いに声をかけ砂場に行き遊ぶが、2人の遊びがかみ合わない。そこへ、C1が入って来たことを契機に遊びが変わっていく。C1が入って来たときC6は、「今日、物凄いの作ろうな」とC1に言っている。C1と遊んだ経験からC1との遊びに期待していたのではないのだろうか。C1が入ると続いて、C3、C2、C4、そして、C8も入り遊びが活発になっていった。幼児同士のかかわりを見ると、C1が川に足を入れるとC8も入り「寒い」と言う。C4も入り「つめて―な」とC1と顔を見合わせると言うように友達の行動の真似をしたり、C6「ここ危険だから俺に任せろ」と言うとC8も「ここは危険だから俺に任せろ」と友達が言った言葉を真似したりしている。また、「あっ分かった。ここはこうやって砂を入れる所にしよう。ここに砂を入れろ」とC8が言うとC6は砂を入れて応じるというように、友達に自分の考えを伝えたり、相手に応じた行動をとったりしている。また、C4がトラックを持って来て「こっちはトラックだぜ」と川に入ると、C1は「これ洗ってきたよ」と電車を持って来て「ブーン」と川に電車を走らせるというように相手の遊びの方向に添うような姿も見られる。片付けになりC1が「一杯掘ったな」と言うとC6が「俺が掘ったんだぜ」と言う。するとC1は「すごいな」とC6を褒める。最初から最後まで掘り続けていたのは、C6でそのことをC1は適切に認めている。そして、C1もC6もそれぞれ満足して遊び終えたのではないのだろうか。この事例のように、友達の動きや言葉を真似したり、友達に自分の考えを伝えたり、相手に応じた行動をとったりと、互いに動きや言葉で伝え合うような幼児同士のかかわり合いが活発になるに従い、遊びが発展していく様子が見られた。また、その中で相手の良さにも気付いていると言えよう。

5　仲間との関係をつなぐ「場」

2003年10月22日の事例では、C1、C2、C3、C4が製作コーナーでそれぞれが武器を作っているが、「合体できるんだよ」と武器を合体させることに意識が向いているように思われる。C2は、C1とC3が武器を合体させている様子を見て、製作コーナーに行き紙を細く折ったものを作り、C1とC3のそばに立つ。するとC1がC2の作ったものを武器の中に差し込むというように、C2は友達が作ったり、合体させたりしている様子を見ながら、必要なものを考えて作っていると思われる。また、C4は、自分の引き出しにある数本の筒から武器にいいものを選んでC1に提供している。武器作りの過程では、自分たちで作って遊ぶことで、一人一人が物と取り組み、手ごたえを感じ、その活動が経験として積み重ねられていく。その中で互いの関係がつながってきていると言えよう。つまり、仲間同士の間に遊具が介在することで仲間関係に新たな局面が展開されてくるのではないのだろうか。

また、2003年10月28日の事例では、C1、C3、C4は基地ごっこへ後から参加する。遊びへの仲間入りの仕方は相手に聞いて入るときもあるが、面白そうな遊びへ断りなく入り込んでいく場合もあった。しかし、この事例では仲間のC3がC1に「入れてと言わないと」と遊びに入るルールを伝えている。また、C4が入ろうとすると、基地にいたC9が「喧嘩しなければ」と入るための条件を伝える。それに対してC4は、「入りますよ」と断って入っている。このように、いろいろな友達とのかかわりや、遊びを経験して行く中で、いつも一緒に遊んでいた仲間の関係や他の幼児との関係が少しずつ変容していると言えよう。

Ⅳ　まとめ

以上のように、C1、C2、C3、C4を中心とした仲間関係を視点に捉えてきた結果、次のことが明らかになった。まず、進級して新しい環境に適応していく過程では、4人にとっては、親しい友達と一緒にいることが安心して自分をだせる「場」であると言えよう。次に、同じ目的に向かって遊ぶ中で感動体験を共有し、そこで遊んでいる者同士が共有する楽しい「場」が見られるとともに、友達との微妙な関係やかかわりをもちながらも、個々のつながりだけでなく皆と一緒に遊ぶ楽しさを味わっている姿も捉えられた。そして、始めは仲間と体を触れ合う直接的な結びつきを楽しんでいたが、徐々に、仲間以外の友達ともかかわり一緒に遊ぶ中で、互いに動きや言葉で伝え合ったり、相手の良さにも気付いていったりしている。さらに、仲間同士の間に遊具が介在することで仲間関係に新たな局面が展開されたり、いろいろな友達とのかかわりを経験していく中で仲間や他の幼児との関係が変容している姿が捉えられた。

NII-Electronic Library Service